

『狐物語』

文学部フランス語学講座 ◆ 原野 昇
フランス文学講座



中世のトリックスター

向こうから魚をいっぱい積んだ荷車がやって来るのを見た狐のルナールは、道の真ん中に寝ころんで死んだふりをする。荷車ひきたちは狐を見つめ、市場で売ったら毛皮が金になるだろうと、荷台にのせる。

のせられたルナールは、早速まわりの魚をかたづけしからちようだし、腹いっぱいになると、女房・子供への土産にとうなぎの束を肩にかつぎ、荷車から飛び降り、「あばよ」と言つて立ち去る。

荷車ひきたちの悔しがるまいことかと、これはほんの一例。

主人公の狐のルナールは、ペテン、暴力、強姦、盗みなどありとあらゆる悪行のし放題。ただし、だましたつもりがだまされていたこともしばしば。とにかくおもしろい。まさにピカレスク(悪漢)小説の元祖と云つてよからう。

このような笑いの文学が、なぜ中世のフランスに生まれたのだろうか。

というのも封建制のモラルとキリスト教の教えが社会全体にゆきわたる、教会の権威が精神生活の基盤となっていた十二・十三世紀のことである。

ルナールは、ライオンの国王をはじめ並みいる諸公をも平気でだまして手玉にとりし、「あらゆる悪党、裏切り者、不忠者に神様のお護りがありますように。誠実な修道士や司祭には苦しみをお与えになりますように」と祈るのである。

このような作品が、時評書や聖人伝と並んで、高価な羊皮紙を使って書き写されたのである。しかもそのような創造活動を行ったのも、書写作業に従事したのも、農民・町人では決してなく、聖職者をも含めた知識階級の人々だったのである。

『狐物語』とのつき合い

訳者と『狐物語』との本格的な出会いは、三十年近く前のフランス留学時代(一九六七〜七〇年)に遡る。以来『狐物語』の魅力にとり憑かれて、今回の共同訳者である鈴木覺愛知県立大学教授、福本直之創価大学教授とともに、未校訂写本を底本とした新校訂本を刊行(一九八三、八五年、フランス図書)し、一九八八年には紹介書『狐物語の世界』(東京書籍)を刊行してきたので、今回の刊行

は『狐物語』第三弾ということになる。

しかし実を言うと、今回の翻訳は『狐物語』全約三万行のうちのおよそ三分の二の分量でしかない。したがって将来は、今回盛り込むことができなかった残りの三分の一をも含めた、『狐物語』の完全翻訳版を刊行したいと考えている。

国際狐学会

『狐物語』を主要な研究対象とする国際学会として国際動物叙事詩学会(通称「狐学会」という)があり、隔年に国際会議が開催されている。

これまでヨーロッパのみで開催されてきたが、日本でも研究が盛んになってきたので、来(一九九六)年七月二十二〜二十五日に東京で特別大会を開催することに決めた。

いさばかり上その開催責任者を引き受けることになり、目下その準備に追われている。

幸い、日本学術振興会の外国人招へい(短期)研究員として、同学会の会長であるピアンチョット教授(ボワチエ大学)が今秋(十月二十日〜十一月三日)来日されるので、来年の東京大会の打ち合わせを行うことができる。

また、日本フランス語フランス文学会と在日フランス大使館とか

ら公式の後援を受けることが決定し、心強いかぎりである。

来年の国際動物叙事詩学会東京大会の基調講演者としては、東京外国語大学アジアアフリカ研究所の川田順三教授(「口承昔話における人間と動物」)が予定されている。

またその際、本会議と並行して、慶応大学をはじめ日本の各地にあるヨーロッパ中世写本の展示会を、何らかの形で開催することができればすばらしいと考えている。その場合には広島大学所蔵の『狐物語』断片写本が目玉となることは言うまでもない。

『狐物語』五八〇〇円(白水社)

プロフィール

(はらの・のぼる)

- ◆一九四三年生まれ
- ◆一九七〇年広島大学大学院文学研究科博士課程中途退学
- ◆一九八八年より現職
- ◆専攻 中世フランス文学

